

印度歐羅巴語を發見したことである、一はソグデアナ語、二は獨逸ストラスブルヒのロイマン (Leumann) 教授が假りに第一言語と稱し、伯林のミューラー (Miller) 博士がトカラ語と呼び、近くは巴里のレヴィ教授が龜茲語、焉耆語と名付けたもの、三はロイマン教授が第二言語といひ、他の人々によつて東方イラン語とも呼ばれ、諾威のステン・コノウ (Sten Konow) 教授の于闐語と稱して居るものである、此の中第一のソグデアナ語といふのは早くも紀元前六世紀時代に既にその名を知られて居るスグダ (Suguda) 即ち今の露領中央亞細亞のサマルカンド地方を中心として行はれた古代のイラン語である、此の言語については以前から大分注意せられ、これで書いた貨幣の如きは、熱心に研究した學者もあつたが、然も此の國語で書いた文書經典の類の知られ、完全にその言語を研究し得るに至つたのは之を以て初とせねばならぬ、第三の所謂第二言語といふものも亦一種のイラン語であるが、しかもソグデアナ語とは餘程相違があつて、言語の構造なども壞れて居る所が多いといはれて居る、次に第二のトカラ語だが、トカラといふものは葱嶺の西方、今の阿姆河流域の地バルクを中心とした地方、玄奘三藏の觀貨羅と記してある地方で、元來此の地方に據つた民族の用ゐて居た言語と考へられて、ベルリンのミューラー (Müller) 博士によつて命名せられたものである、併しながら此の名が穩當でなく、實は龜茲語及び焉耆語と名付くべきものであるといふ説が一九一三年に巴里のレヴィ (Lévi) 教授によつて稱へられたことは既に本誌第二卷第三號「龜茲・于闐の研究」に於て述べて置いた如くである、此の言語の A B の兩種即ちレヴィ氏の焉耆語及び龜茲語と稱するものは、共にイラン語でもなく、印度の言語でもなく、その特徴からすれば印歐語の中でも寧ろ歐羅巴の方のものに近似した珍らしい言語である。